

令和7年10月20日(月)

京都市社会教育委員会議第3回読書専門部会摘録

協議事項1 子どもの視点に立った読書活動の推進～アンケート結果を踏まえて～

(主な意見)

- ・アンケート結果を踏まえると、子どもに本を読ませる前に、子どもが読みたい本を置くなどの環境整備が必要かもしれない
- ・子どもが見ている本の世界を広げる取組が必要
- ・公共図書館の今後の在り方については、固定概念から離れて考えていくことが求められているかもしれない
- ・アンケート結果を有効に活用し、施策に反映するための取組を進めて欲しい
- ・読書ボランティアが中心の活動へ学校が意識的に関わることで、子どもが読書に触れるきっかけが増え、子どもの様子も変わる
- ・アンケート結果にあった、現実逃避から本を読むきっかけとなる「読みたい気持ち」も、読書活動の推進にうまく活用できないか
- ・大学の図書館などに所蔵されている、昔の貴重な本に触れる体験があると、本への興味や敬意を育むきっかけになる
- ・公共図書館、学校図書館は、蔵書数を増やすだけでなく、本との出会いのタッチポイントをどれくらい作れるかが大事
- ・各図書館のユニークポイントの打出しも必要
- ・動画などのメディアと読書の関係についてはもう少し検討する必要がある
- ・学校が読書活動についてどのような方針を持っていて、その中で学校司書にはどのような役割を担ってもらいたいのか、学校図書館の専門職である司書教諭との連携、学校がどのように協力していくのかなど、組織的な取組を確認していくことが大切

<発言詳細>

- 不読率が高いという結果だが、一方で、図書館に求めることは何かという質問には、「居心地」のほかにも、「知的好奇心がくすぐられる仕掛け」という意見があった。図書館には、読みたい本があることが大事。特に中学校図書館の蔵書については、貧弱であるという印象を持っている。子どもに本を読ませる前に、子どもが読みたい本を置く方が先かもしれない。
- 前回の専門部会で紹介された子どものその他意見の、「これ以上読む本がない」「読み尽くした」という回答に対してどう対応すべきかだが、子どもが見ている本の世界を広げる工夫を行っていくことも必要である。
- 子どもたちは「読みたい本がない」と思っているが、本当に本がないのか、本の探し方を知

らないのか、興味・関心の広げ方を知らないのか、回答の裏にある実態を探る必要がある。また、公共図書館に求めるものは何かに対する回答を見ていると、これからの中の公共図書館の在り方についても、従来の図書館は本を読むところというイメージや固定概念から離れたほうがいいのかもしれません。

- 不読率の高さは、インパクトが大きい。PTAしんぶんに保護者向けの啓発記事を掲載することは大変有効かと思うが、他方、教育委員会内や教員に向けて、子どもたちの不読率がこれだけ高いんだ、ということを積極的に周知するなどして、アンケート結果を施策に有効に反映していくことが必要ではないか。
- 自身の学区では、約3日間の期間を設けて、子どもたちによる選書会を行っている。先生の負担軽減にもつながり、子どもたちも自分が選んだ本がいつ入るのか気になって図書館にやってくる。夏休みの学校図書館開放も昔に比べると開館日は少ないが、全校児童800人中約1割の子どもが利用した。朝読書の時間も、週に1日だけは先生が読み聞かせをすると長いお話を継続して読めて効果的。
- 読書週間に読み聞かせボランティアをしているが、先生の一声で子どもたちの参加人数が増える。読書ボランティアが中心の活動へ学校が意識的に関わることで、子どもが読書に触れるきっかけが増え、子どもの様子も変わる。
- 朝読書については、自身の経験上、読み始めた本を最後まで読みきれるかという課題がある。朝読書がいいきっかけになっているとは思うが、その場だけになつてないか。
- 本を読むきっかけとして、「勉強したくないとき」という意見があったが、とてもよくわかる。現実逃避したくなると、部屋の掃除をしたり本を読みたくなったりする。そういうきっかけの「読みたい気持ち」も読書活動の推進にうまく活用できないか。
- 子どもたちには、世の中にはまだ読んでいない本がたくさんあることを知って欲しい。大学の図書館などには、とても古くて貴重な本が所蔵されており、そういう貴重な本に触れる体験も、本への興味や敬意を育むきっかけになる。
- 本を読むという行為の中で大事だと思うのは、①読んで面白かった経験をもつこと②読んだ本について話せる相手がいること③孤独なひとりの時間をもつこと。日常の中でひとりの世界に入ることができるということ。
- 公共図書館、学校図書館は、蔵書数を増やすだけでなく、本との出会いのタッチポイントをどれくらい作れるかが大事。書店には、それぞれのオリジナリティがあり、目的に応じて直感的に選ばれている。今後の公共図書館の広がりを考える上では、例えば蔵書の種類や、雰囲気、この図書館はにぎやかに過ごせる、この図書館はすごく静かな空間がある、など各図書館に際立つ

た個性、ユニークポイントの打出し、なども必要かと思う。

「本を読み尽くした」と答える子どもは自分の好きなジャンルしか見えていないのだと思うが、公共図書館も同じ蔵書を揃えるのではなく、実際には蔵書の特色があるのかもしれないが、それが外には見てこない。公共図書館に対する意見を聞くとしても、例えば「静かでゆっくりできる」と「友達と仲良く話せる」が同数だった場合、どう対応するか。平均的なところを目指すのではなく、京都市内にいろいろユニークな図書館があれば、それを求めて来館者が増えるのではないか。

- 朝日新聞に「そうだ、図書館行こう」という京都市教育委員会の事業に関する記事が掲載されていた。左京、右京、中央図書館の3館でそれぞれ違うイメージでやろう、という取組かと思う。

事務局 今年度に公共図書館が取り組んでいる試行的事業である。本来の図書館機能は損なわずに、各図書館の特色をどう出していくかは、試行結果やアンケート結果も踏まえて、担当部署で検討を進める。

- 不読率の調査の結果＝子どもが読んでいないと言い切れるものではない。調査時期にも影響されるし、読んでいる本のレベルや分量によっては1箇月では読み切れず、1冊読み切ったとしてカウントされていないかもしれない。

○ テレビやYouTubeなどの動画を見て時間がないという結果が出ているが、その結果と不読率の結果とを結びつけて考えてよいものは分析が必要。動画の内容も様々であり、本の内容をわかりやすく紹介するもの、お勧めの本を紹介するものなど、読書に関連する内容のものもある。特に中学生以上になると、先生の影響を受けづらくなる一方で、動画などのメディアをきっかけに本を読んでいる子どもも多い。メディアと読書の関係についてはもう少し検討する必要がある。

事務局 読書には能動的な行為が必要となる一方で、テレビやYouTubeは受動的なものなので、手軽さや負担感において、その差は大きい。

- 居場所については、海外の図書館には、図書館にラボのような空間を作り、本をきっかけにした工作ができるようにしたり、防音室を置いて、図書館の楽譜を使って楽器の練習ができるようにしたりという工夫をしているところがある。図書館にある資料を活用して、他の活動ができる図書館という在り方が、特色的ある図書館のポイントになりうる。

- 今回のアンケートは、子どもと保護者対象だったが、学校図書館の現場を見ている学校司書の声をもっと聴くべきではないか。

- 学校図書館の専門職はまず司書教諭だが、役割が見えづらい。司書教諭と学校司書がどう協力できているか、学校が読書活動についてどのような方針をもっていて、その中で学校司書には

どのような役割を担ってもらいたいのか、学校がどのように協力していくのかということを見ていくことが大切。

協議事項2 京都ならではの魅力に親しむ読書について

(主な意見)

- ・京都には小学生向けの郷土資料が少ない。また、郷土資料の蔵書には、伝統文化や古典だけではなく、偏りがないようにするべき
- ・子どもたちに京都らしさを伝えるときは、伝統文化、歴史の観点だけでなく京都の先進性についても伝えていく必要がある
- ・文学を切り口に、地域と結びつけて子どもたちを歩かせる、という企画もいいのではないか

<発言詳細>

- 京都には小学生向けの郷土資料が少ない。例えば、「京都の地理ものがたり」はとても良い資料だが、古いものしかない。京都の民間企業がお金を出して作ったマンガなどもあるが、小学生用の資料が十分提供されているとは言えないのではないか。「京都ならでは」で焦点があたる分野として、源氏物語と小説以外にも、疏水をはじめとする明治維新の技術革新の話、植生、動物、自然など、様々な分野がある。郷土資料の蔵書には、分野に偏りがないように意識すべき。
- 京都らしい何か、となるとお茶やお花、古い古典・文学の世界が取り上げられることが多く、そこも大事だが、京都らしさについては広く考えた方がいい。疏水や、初めて幼稚園ができた地など、京都は先進的な取組をしてきた町。先進性と伝統の両輪で考えていかなければ、京都というものが単に古めかしい町、伝統・歴史のある町という捉えになってしまってはもったいない。子どもたちはメッセージを敏感に受け止めるとと思うので、京都は新しいものを作り上げてきた先進性がある町である、という前向きなメッセージもきちんと伝えるべき。それをするかどうかで、次の世代の立ち居振る舞いが変わってくると思う。
- 3年生で「わたしたちの京都」という教材を使って学ぶときに、先生が子どもたちに薦められる関連本があるといい。個人的に小説の舞台を散策する聖地巡礼みたいなことをしたことがある。京都には、京都文学賞など、中高生が主体的に手に取れる色々な素材があるが、小学生には大人がもっと工夫する余地がある。
- 京都の地名も面白い。「とおりうた」も素敵だと思う。
- (市庫連) 京都の地名などが盛り込まれたわらべうたがあり、子育てが楽になるよと紹介している活動もある。
- 京都新聞の紙面で過去に「紫式部・源氏物語を歩く」、といった企画があった。古典をその

まま読むのは子どもたちには難しいが、京都は古典の時代からずっと人々が住み続けている町なので、例えば、今の町を訪れながら過去のその町の姿を想像する、ということが時代の勉強にもなる。小説や文学の舞台を歩く、という企画も何度もしたことがある。(明治、江戸、平安などの) 文学を切り口に、地域と結びつけて子どもたちを歩かせる、という企画もいいのではないか。

事務局 これまでの会議における委員の皆様の貴重な意見を踏まえ、今後の答申の作成に向けて改めて意見を聴取する機会を設ける予定。

出席者：

読書専門部会委員

部会長： 松田 規久子委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

副部会長：岩崎 れい委員（京都ノートルダム女子大学教授）

伊住 禮次朗委員（茶道総合資料館副館長）

豊田 まゆみ委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

永田 紅委員（歌人、京都大学大学院農学研究科研究員）

京都市子ども文庫連絡会

代表 後藤 由美子

副代表 今橋 久美子

庶務 鈴木 美和

生涯学習部

有澤 重誠 教育委員会生涯学習部長

松下 誠太郎 教育委員会生涯学習部首席社会教育主事

鳴本 公一 生涯学習部学校地域協働推進課長

小田 有希子 生涯学習部家庭教育事業係長

※職名等は令和7年10月20日時点